

ISSN 2187-0691

Japanese Journal of Maritime Activity

Vol.13 No.2

第13卷 第2号

海洋人間学雑誌

November 2024

令和6年11月

第13回日本海洋人間学会大会
大会号



日本海洋人間学会

Japan Society for Maritime Activity

目 次

第 13 回日本海洋人間学会大会 大会次第	36
学会役員・大会実行委員会・補助学生・会場	37
大会プログラム	38
大会にご参加の方へ・懇親会にご参加の方へ	41
一般口頭発表者および基調講演講師の方へ	42
ポスター発表者の方へ・アカデミックコンテスト出場校の方へ・宿泊について	43
優秀論文賞、奨励論文賞の表彰・優秀発表賞、奨励発表賞の選考および表彰	44
海洋人間学雑誌 投稿料無料のご案内・その他	44
第 13 回日本海洋人間学会大会基調講演およびアカデミックコンテスト要旨	45
第 13 回日本海洋人間学会大会基調講演要旨	46
第 13 回日本海洋人間学会大会アカデミックコンテスト要旨	47
一般発表抄録	49

編集後記/59

第13回日本海洋人間学会大会

大会次第

主催：日本海洋人間学会

会期：2024年11月23日（土）・24日（日）
会場：東海大学静岡キャンパス 8号館4階

【大会実行委員会本部】

〒424-8610 静岡県静岡市清水区折戸 3-20-1
東海大学静岡キャンパス 8号館 鉄 研究室
TEL 054-334-0411（代表）

e-mail：tetsu★tokai.ac.jp
(★を@に置換してください)

第13回日本海洋人間学会大会

学会役員

会長 : 久門明人

副会長 : 千足耕一

常務理事 : 千足耕一 (兼務)

理事 : 阿保純一 金田晃一 菊地俊紀 小泉和史 佐々木剛
蓬郷尚代 林 敏史 坂 利明 平野貴也 藤本浩一
渊 真輝 松本秀夫 矢野吉治

監事 : 漆谷伸介 寺澤寿一

相談役 : 神田一郎 佐野裕司

事務局長 : 蓬郷尚代 (兼任)

第13回大会実行委員会

委員長 : 鉄 多加志、副委員長 : 村山 勝

委員 : 阿保純一 加藤 譲 金田晃一 菊地俊紀 千足耕一 蓬郷尚代 藤本浩一 松本秀夫

補助学生

東海大学学生

会場

東海大学静岡キャンパス 8号館4階

アクセス、キャンパスマップは以下のリンクをご参照ください。

<https://www.u-tokai.ac.jp/about/campus/campus-shizuoka/>

メイン会場 8404 教室
事務局控室 8410 ゼミ室
休息所 PLAT

大会プログラム

11月23日(土曜日・祝日)

10:30～11:15 現理事会 (任期：2022年9月26日～2024年11月24日)

11:15～12:15 次期理事会 (任期：2024年11月25日～2026年通常総会開催日)

12:30～12:50 受付

12:50～13:00 学会大会開会の辞

13:00～14:00 口頭発表 セッション1

- 座長：千足 耕一 (東京海洋大学)
- Ob01. 学校教育にライフセービングを取入れた水辺安全教育の実践
林 昌広 (国際武道大学大学院/コンディショニング科学研究室)
- Oa01. 大学生における海辺をフィールドとする野外教育実習前後の海洋リテラシーの変化
植田 晃輔 (東海大学大学院)
- Oa02. 青少年を対象とした海洋スポーツ活動プログラムの教育的意義とその効果
- 江ノ島における活動を事例に -
小林 俊 (一般社団法人江の島海洋教育センター)
- Oa03. 大学カリキュラムにおける海洋スポーツプログラムの位置づけと運用課題
川邊 保孝 (東海大学)

タイトルの記号は以下の通りです

Oa：口頭による研究発表

Ob：口頭による実践報告

第13回 日本海洋人間学会大会 基調講演&アカデミックコンテスト

14:10～15:30 第13回 日本海洋人間学会大会 基調講演 - 無料一般公開 -

「海洋スポーツによる地域振興」

講師：合志 明倫 ((株)gosea's 代表取締役、東海大学海洋学部 客員准教授)

司会：平野 貴也 (一般社団法人 レジャースポーツ研究所)

15:40～16:50 第13回 日本海洋人間学会大会 アカデミックコンテスト

「海洋人間アカデミックコンテスト」ポスター発表

出場校：北海道小樽水産高等学校、静岡県立焼津中央高等学校、静岡県立焼津水産高等学校、
静岡県立清水南高等学校、城南静岡高等学校、東海大学附属静岡翔洋高等学校

コーディネーター：鉄 多加志(東海大学)

18:30～20:30 懇親会 会場：Ulalena (ウラレナ) 〒424-0901 静岡県静岡市清水区三保 2729

<https://ulalena.jp/top#access>

11月24日(日曜日)

8:40~9:10 受付

9:15~10:15 口頭発表 セッション2

座長：藤本 浩一（東京海洋大学）

Ob02. 伝統文化帆掛サバニを活用した大学実技授業の実践報告

遠矢 英憲（名桜大学）

Oa04. 南伊豆沖に沈んだニール号研究調査

鉄 多加志（東海大学）

Oa05. 大阪商船の広報にみられる「花毛布」について

服部 恵理子（神戸大学大学院）

Oa06. 年代による断続的な息こらえ潜水の予備心拍数と血中乳酸値の特徴について

永島 昇太郎（帝京大学）

10:20~11:05 口頭発表 セッション3

座長：渕 真輝（神戸大学大学院）

Ob03. 沿岸海域におけるレスキューブイを活用した行方不明者捜索の効率化について

伊藤 裕樹(海上保安庁第三管区海上保安本部警備救難部救難課/東京海洋大学大学院)

Oa07. 海上保安庁の事故データに基づくカヌー及びスタンドアップパドルボード(SUP)による釣りの事故防止対策に関する研究

伊藤 裕樹(海上保安庁第三管区海上保安本部警備救難部救難課/東京海洋大学大学院)

Oa08. ネイチャーガイドを対象としたセーフティマネジメントに関する聞き取り調査

千足 耕一（東京海洋大学）

11:10~12:10 口頭発表 セッション4

座長：松本 秀夫（東海大学）

Oa09. ダイビング経験と食行動の関係ーダイビング業と漁業の共存を目指して

三宅 龍太（東京海洋大学大学院）

Oa10. ウインドサーフィン・ワールドカップ観戦者における観戦評価と行動意図の関係性：居住地、種目経験、観戦経験の違いに着目して

平野 貴也（(一社) レジャースポーツ研究所）

Oa11. 遊漁船利用を伴う釣り愛好者の環境配慮行動に関する調査研究

荒井 良乃介（東京海洋大学）

Oa12. 海洋ごみの年間漂着量の実態調査：鹿屋体育大学海洋スポーツセンター前の海岸を対象とした事例研究

笹子 悠歩（鹿屋体育大学）

タイトルの記号は以下の通りです

Oa：口頭による研究発表

Ob：口頭による実践報告

12:15～12:45 ポスターセッション

Pb01. 海中から回収したゴミの利用方法について

鈴木 凧 (東海大学海洋学部)

Pa01. 移住したアウトドアスポーツ実践者のワークライフ・インテグレーションと Well-being—テキストマ
イニングからの分析—

松本 秀夫 (東海大学)

タイトルの記号は以下の通りです

Pa : ポスターによる研究発表

Pb : ポスターによる実践報告

12:45～13:30 昼食

13:30～14:15 第13回日本海洋人間学会総会

14:15～14:45 優秀・奨励論文賞および第13回学会大会優秀・奨励発表賞表彰式

14:45～14:50 学会大会閉会の辞

大会にご参加の方へ

大会へのご参加は、下記の2024年度(2024年8月1日～2025年7月31日)会費および大会参加費を納めた本学会会員に限ります。なお、口頭もしくはポスター発表の筆頭者である学生会員の参加費は無料です。本学会会員以外の方も臨時会員として、大会当日に参加費を納めることで参加することができます。ご入会を希望される場合は、下表にある年会費とともに正会員は入会金1,000円が必要となります。

	年会費	大会当日参加費
正会員	6,000円	3,000円
学生会員	3,000円	2,000円 (学生証を提示)
賛助会員	一口20,000円	2,000円 (一口1名まで)
臨時会員	—	5,000円 (大会当日受付)

* 学会発表筆頭者の学生会員は大会参加費無料

懇親会 (11月23日 (土曜日) 18:30～20:30 会場：‘Ulalena (ウラレナ)) にご参加の方へ

懇親会の会場 (<https://ulalena.jp/top#access>) は、東海大学静岡キャンパスより北へ約3kmに位置しておりますので、移動の際に公共交通機関 (バス) をご利用の方は、以下の時刻表をご参考ください。

23日 (土曜日)

学会会場 (東海大学・海技短大前) → 懇親会会場 (「エスパルス練習場入口水上バスのりば」が最寄りバス停となります。二つ手前のバス停となる「三保車庫前」が終点のバスに乗ると会場まで徒歩10分程度・約800m)

静鉄バス 17:16～17:23 三保車庫前 (終点)
17:36～17:45 エスパルス練習場入口水上バスのりば (最寄りバス停)
17:56～18:03 三保車庫前 (終点)

懇親会終了後、公共交通機関 (バス) にて清水駅に移動される方、懇親会会場隣接のビーチホテルゴースに宿泊されて翌朝24日 (日曜日) に学会会場へ移動される方は、以下の時刻表をご参考ください。

23日 (土曜日)

懇親会会場 (三保車庫前※懇親会会場から徒歩10分程度) → 清水駅

静鉄バス 20:25～20:51
20:55～21:21
21:25～21:51 (最終バス)

24日 (日曜日)

ビーチホテルゴース (三保車庫前※宿から徒歩10分程度) → 学会会場 (東海大学・海技短大前)

静鉄バス 7:54～8:01
8:14～8:21

懇親会の参加会費は一般6,000円、学生5,000円となっております。準備の関係上、11月20日までに下記までお振り込みください。なお、11月21日以降は当日受付にてお支払いください。

年会費、参加費および懇親会費の納入は、以下の学会口座への振込にてお願いします。

ゆうちょ銀行
口座名義：日本海洋人間学会
口座番号：00150-6-429943

インターネットバンキング
銀行名：ゆうちょ銀行
・金融機関コード:9900
・店番:019
・預金種目:当座
・店名:〇一九 店（ゼロイチキユウ店）
・口座番号:0429943

各種振込時のお願い

- ・郵便局の振込用紙をご利用の場合は、振込金額の種別を通信欄にご記入ください。
(記入例：2024 年会費として)
- ・インターネットバンキングをご利用の場合は、振込人氏名の前に振込金額の種別をご入力ください。
(記入例：2024 ネンカイヒカイヨウタロウ)。

一般口頭発表者および基調講演講師の方へ

1. 発表者は会場到着後、ご自身の発表の前までに必ず受付を済ませてください。
2. 発表形式は、PowerPoint を使用した液晶プロジェクターによる一面映写を原則とします。また、発表中のパソコンの操作は、発表者の責任において行って下さい。
3. 前演者の発表が開始した後に必ず次演者席へお座り下さい。1 演題の持ち時間は、13 分（発表 10 分、質問 3 分）です。呼び鈴は 8 分に 1 回、10 分に 2 回、13 分に 3 回鳴ります。
発表時間を厳守して下さい。持ち時間の 13 分を経過した場合は、その場で発表を打ち切って頂くこともあります。
4. 発表用 PowerPoint ファイルは、受付に準備されている学会所定のパソコンにコピーしたのち、**必ずご自身で動作確認を行って下さい。**

パワーポイントファイルのコピーについて

- ・ **口頭発表セッション 1、基調講演は 23 日（土曜日）の 12:30～12:50**
- ・ **口頭発表セッション 2, 3, 4 は 24 日（日曜日）の 8:40～9:10**

プレゼンテーション用のパソコンは学会本部で準備したものを使用し、それ以外のパソコンは原則として使用できないものとします。パソコンのシステムおよびプレゼンテーションアプリは、Windows11、最新バージョンの PowerPoint となりますので、この環境で正常にファイルが動作するようにご作成ください（Apple 社製のパソコンについては、別途ご相談ください）。

5. PowerPoint ファイルに動画を埋め込む場合は Windows11 環境下での最新バージョンの PowerPoint において再生可能であるファイル形式、なおかつ容量も極力少なくしたものをご使用ください。また当日は PowerPoint ファイルのみならず、動画ファイルの原本も合わせてお持ちください。学会本部でも動画ファイル形式や再生に関して幅広く対応できる準備を整えておりますが、万が一再生できない場合はご容赦下さい。

ポスター発表者の方へ

1. 発表者は会場到着後、ご自身の発表（指定質疑応答時間）の前までに必ず受付を済ませてください。
2. ポスターのサイズは、A0版縦置き（1,189mm×841mm）の範囲内とします。
3. **ポスターは、23日（土曜日）11:30から24日（日曜日）12:15**までに、発表者の責任において掲示して下さい。また発表者は、指定質疑応答時間中（24日（日曜日）12:15～12:45）ポスターの前にて質疑応答を行って下さい。取り外しはポスターセッション終了後から学会大会終了時までに行ってください。なお掲示場所は、学会会場4階のエントランスホールのスペースとなります。詳細は当日受付にてご確認ください。
4. 掲示用のピンまたは磁石等は学会本部にて準備しております。

アカデミックコンテスト出場校の方へ

1. 発表者は会場到着後、15:40開始のアカデミックコンテストの前までに必ず受付を済ませてください。
2. ポスターのサイズは、A0版縦置き（1,189mm×841mm）の範囲内とします。ポスターの印刷は各高校にてお願いします。
3. ポスターは発表者の責任において、設置しているボードに掲示し、コンテストが終了次第取り外して下さい。発表者は、受付順にポスターの前で10分以内のプレゼンテーションならびに質疑応答を行ってください。審査員がポスターの内容と発表について採点を行います。
4. 掲示用のピンまたは磁石等は学会本部にて準備しております。
5. 優秀発表については、審査終了後に表彰します。参加者に対して、発表証明書を発行します。
6. 発表に伴う交通費補助などはありません。駐車場のご利用は、体育館南側のスペースをお使いください。
7. 高校生の発表者、引率教員の学会参加費は無料です。

宿泊について

宿泊施設の手配は大会事務局では行っておりませんが、大学近隣に宿泊施設がないことから懇親会場に隣接するビーチホテルゴーシーズ (<https://beach-hotel-goseas.com/>) のご利用をお勧めしております。この期間中は、大会参加者の予約を優先的に受け入れることになっています。予約の連絡をする際には、本学会大会の参加者あるいは関係者である旨をお伝えください。

優秀論文賞、奨励論文賞の表彰

賞選考委員会にて、海洋人間学雑誌第9巻第3号から第12巻2号に掲載された論文について優秀論文賞、奨励論文賞の選考を行いました。24日（日曜日）午後の総会終了後に賞状の授与を行います。

優秀発表賞、奨励発表賞の選考および表彰

第13回学会大会における一般口頭発表およびポスター発表については、賞選考委員会にて優秀発表賞と奨励発表賞の選考を実施し、24日（日曜日）午後の総会終了後に賞状の授与を行います。

海洋人間学雑誌 投稿料無料のご案内

第13回学会大会にて一般口頭発表およびポスター発表が行われた演題につきましては、2025年2月28日までに海洋人間学雑誌（ISSN:2187-0691）にご投稿頂きますと、投稿規定に定めのある各種論文の投稿料を全て無料とします。投稿規定は、著作権規定およびオープンアクセスポリシーとともに、本号巻末に掲載しておりますので、ご参照・ご確認下さい。

※投稿規定、著作権規定、オープンアクセスポリシーは学会HP（<https://jsmta.jp>）にも掲載されています。

その他

- ・昼食について、東海大学静岡キャンパス付近には3軒の飲食店（みふくさぼう（日曜日定休）、サブリエ・ド・ヴェリエ、雷神家）がありますが、混み合うことが予想されます。学会会場から最も近いコンビニエンスストア（セブンイレブン折戸2丁目店）も片道約1キロの距離がありますので、学会会場に入られる前に、各自でご準備頂くことをお勧めします。

※23日土曜日は、理事会出席者に弁当の用意があります。

※24日日曜日は、総会出席者（理事・監事・代議員）に弁当の用意があります。

第13回日本海洋人間学会大会

基調講演およびアカデミックコンテスト要旨

11月23日(土曜日) 14:10~15:30

第13回 日本海洋人間学会大会 基調講演

「海洋スポーツによる地域振興」

講師：合志 明倫 ((株)gosea's 代表取締役、東海大学海洋学部 客員准教授)

司会：平野 貴也 (一般社団法人 レジャースポーツ研究所)

ーウォーターフロントから清水港振興を考えるー

昨今、海洋をテーマとした新しい創造が各地で進んでいる。ここ清水港でも、開港から125周年を迎え、これから未来を見据えた新しい動きが増えてきている。また、世界文化遺産になって10年を迎えた三保の松原周辺も同様であり、海辺の街での現状や今後について検討してみたい。この三保地区のエリアは東海大学、海洋科学博物館を軸としたアカデミックな施設が53年前より形成されてきたが、建物の老朽化などその全てが縮小傾向にあり、地域では多くの民宿やホテルが倒産や閉鎖を迎えた。海岸では朽ち果てた古い海の家が立ち並び、その周辺は、世界文化遺産の名の元にあるとは、とても考えづらいものであった。

33年間プロウインドサーファーとして活動し、世界各地の海辺を感じてきた視点から、このエリアの優位性や可能性を感じ、教育旅行、ホテルレストランなどを新たに構築。コロナ禍より準備をし、アフターコロナにおける今後のエリアの発展などを実践的に検証してきた。年間5,300名の教育旅行の誘致などの海洋活動(マリンアクティビティ)を積極的に取り入れる事で、小学校4、5年生のみなさんが、純粋に体験を楽しんだり、感じたりする事はもとより、その1/4の生徒が海水に触れることさえ初めてだと言うことがわかってきた。

今後の清水港周辺での様々な可能性を示唆して、講演者の現状の実践例を報告する。

演者プロフィール

合志 明倫(ごうしあきのり)1973年11月19日(51歳) 本籍:熊本県

職業:(株)gosea's 代表取締役、東海大学海洋学部 客員准教授

JWA(日本ウインドサーフィン協会)公認プロウインドサーファー

1996年(株)三井物産スポーツとプロ契約

2004年 北京オリンピックナショナルチーム JOC 強化指定選手

2009年~2001年 JWA プロランキング 2位

2017年 PWA ワールドカップ日本大会日本人最高位

2008年 「gosea's surf」開業

2016年~2020年 東海大学海洋学部海洋フロンティア教育センター特任講師

2020年~現至 東海大学海洋学部 客員准教授

2021年 「Beach hotel gosea's」開業

2022年 「Ulalena」開業

略歴

中学高校はハンドボール部に所属。大学進学と同時に本格的にウインドサーフィンを始め、在学中から多くの大会に出場し注目を集める。静岡県三保海岸を拠点に活動し、世界大会にも積極的に参戦した。2004年、2005年は国内プロランキング2位。2006年北京オリンピックナショナルチームのメンバーとして活躍する。現在もプロ活動をしながらワールドツアー参戦すると共に、2008年ホームゲレンデにプロショップ「gosea's surf」をオープンし、ウインドサーフィン教室はじめマリン系情報発信基地として地元のみならず多くの方々とコミュニケーションスペースを提供している。

2017年 PWA ワールドカップ日本大会にて日本人最高位を獲得するなど、トッププロでありながら東海大学海洋学部客員准教授として教壇に立ち、若い世代の育成を含めた総合的な海洋スポーツ発展に力を注いでいる。また地元との関係が深く、現場での経験値が高く評価され、現在は三保半島ビーチフロント開発に注力している。2021年には「Beach hotel gosea's」を開業し、2021年には5,100名以上の教育旅行を誘致した。さらに2022年にはラグジュアリーな宿泊施設が併設したレストラン「Ulalena」を開業し、月1,000人以上の来店者があり、地域創生に取り組んでいる。

11月23日(土曜日) 15:40~16:50

第13回 日本海洋人間学会大会 アカデミックコンテスト

「海洋人間アカデミックコンテスト」ポスター発表

出場校：北海道小樽水産高等学校、静岡県立焼津中央高等学校、静岡県立焼津水産高等学校、
静岡県立清水南高等学校、城南静岡高等学校、東海大学付属静岡翔洋高等学校

コーディネーター：鉄 多加志（東海大学）

北海道小樽水産高等学校

双胴船の操縦プログラムについて

発表者：宮崎 暖太、三浦 資也

指導教員：澤田 和之

現在、スマート漁業（水産業）と呼ばれる、「ICTを活用し、漁業活動や漁場環境の情報を収集し、適切な資源評価・管理を促進するとともに、生産活動の省力化や操業の効率化、漁獲物の高付加価値化により、生産性を向上させる漁業」が水産業界で進められている。ここで活用するための操船用および水中カメラを備えた双胴型水上ドローンについて操縦するためのプログラムをJavaScript言語を用いて開発した状況について発表する。

静岡県立焼津中央高等学校

海洋ゴミと環境DNA解析による静岡県焼津の魚類相の季節変動の推察

発表者：福安 駿生、石橋 桐磨、石塚 太郎、松本 颯馬、北代 隼斗、岡坂 吏仁、寺尾 莉久斗

指導教員：矢追 雄一

近年、地球温暖化に伴い、海水の温度が上昇している。その影響で、各地の魚類相が大幅に変化しており、特定の地域にいるはずの魚が、他の地域で目撃される事例が数多く報告されている。本研究では、地元、焼津市石津浜海岸の魚類相が年間を通してどのような状態かを環境DNAメタバーコーディング解析した。また、実際に釣れる魚の種類と時期を釣り人からのアンケート調査と海中清掃で回収するルアーをもとに解析した。環境DNA解析の結果、魚類相の大きな変化をつかむことはできないものの、環境の変化を釣り人たちは感じており、釣れる魚の時期や場所の変化をSNS情報などを利用して把握しているということが示された。

静岡県立焼津水産高等学校

人も魚も住みやすい環境を目指して～海中清掃大作戦！

発表者：焼津水産高校ダイビング部

指導教員：藤原 啓太、佐藤 保大、合田 雅行

私たち焼津水産高校ダイビング部は、定期的に焼津市の海岸でダイビングを行い、海中のゴミを回収しています。海中の清掃をすることで、いかに海の中が人によって汚されているか、魚などの生物に悪影響を与えているかを知ることができます。ダイビングによって、人にも魚にも優しい環境づくりを目指しています。回収したごみは、ストラップなどにしてイベントで啓蒙活動に利用しています。

静岡県立清水南高等学校

美しい未来を守るために

発表者：梅島 未羽、漆畑 美咲、森 彩也香

指導教員：水谷 陽介

私たちは、三保松原3ringsの活動の一環で行った「松葉かき」について調べるうちに、海の環境問題について興味を持ちました。現在、二酸化炭素が海に溶け込むことによる海洋酸性化の問題や、マイクロプラスチックなどの海洋ごみの影響による海洋環境の汚染が大きな問題となっています。世界文化遺産にも選ばれた、この美しい三保の海と環境を守るために、私たちのような高校生にできることはなにか考えたいと思い応募しました。

城南静岡高等学校

釣りによる清水港周辺の活性化への提案

発表者：室 麻那斗

指導教員：鈴木 孝

私の趣味は釣りです。しかし、近年の清水港周辺は釣り禁止場所が増え、大好きな釣りを思う存分することができなくなってきています。その背景には釣り人によるゴミのポイ捨てや騒音などマナーの悪化、漁業関係者とのトラブルなどが挙げられています。釣り人の楽しむ場所を釣り人自身で失ってしまっているのです。そこで、これらの問題を改善するだけでなく、清水港周辺の活性化を目的とする提案をします。

東海大学付属静岡翔洋高等学校

「海洋」がたぐ「学び」と「地域」～東海大学付属静岡翔洋高等学校の包括的な海洋社会学習～

発表者：大畑 凜汰、見崎 航平

指導教員：小曾根 龍介

本校で教育活動の一環として取り組んでいる活動について、プレゼンテーションしたいと考えています。

1 三保松原保全とSDGs

本校では三保松原の保全ボランティアに継続的に取り組んでいます。SDGsの観点から枯松葉から作られた再生紙「みほのまつがみ」を授業に取り入れています。

2 地域ブランディング論

三保半島の魅力に着目した合志明倫さんのウラレナを訪れ、地域振興やスタートアップビジネスの実践例について理解を深めています。

3 地域リソースの活用事例

豊富でクリーンな地下海水を活用した三保サーモン養殖場の事例を通して、産学一体となった地域リソースの活用事例について学びます。

一般発表抄録

タイトルの記号は以下の通りです

Oa : 口頭による研究発表

Ob : 口頭による実践報告

Pa : ポスターによる研究発表

Pb : ポスターによる実践報告

23日・セッション1

発表時間 13:00~13:15

Ob01. 学校教育にライフセービングを取り入れた水辺安全教育の実践

林 昌広・山本利春・笠原政志 (国際武道大学大学院 / コンディショニング科学研究室)

キーワード: ライフセービング、水辺安全教育、学校教育、

【背景及び目的】

2023年には全国で1,392件の水難事故が発生し、1,667人が被害を受けた。そのうち743人が死亡または行方不明となっている。この現状から、水辺での安全教育の重要性は増している。本研究は、ライフセービングを取り入れた水辺安全教育の実践事例を通じ、学校教育における持続可能な教育モデルを提案することを目的とした。

【方法】

2014年から現在まで、千葉県夷隅郡御宿町の公立小中学校においてライフセービングを導入した「命の海洋教育」を実践している。このプログラムでは、セルフレスキュー技術と、溺水事故を未然に防ぐための危険回避行動に重点を置いたプログラムを展開している。このプログラムについて、教育行政管理者、学校管理者へのインタビュー調査・受講生へのアンケート調査を実施し、その効果と課題を分析した。

【結果と考察】

「命の海洋教育」の実践を通して、セルフレスキュー技術の反復学習と水辺環境での危険回避行動が、日本の教育課程に沿った形で小学校6年間、中学校3年間にわたり実施可能であることが確認された。一方で、関係者へのインタビュー調査では「水辺安全教育の重要性は理解しているものの、継続するための専門指導者の育成が必要である」という見解が示され、今後の課題が明確となった。

【結論】

本研究を通して学校教育におけるライフセービングを取り入れた水辺安全教育の具体的な導入事例が示され、その有効性も示唆された。今後、文部科学省と連携し、地域の特色を活かした具体的なガイドラインを検討することで、全国の学校において効果的な水辺安全教育を推進していくことが望まれる。こうした取り組みによって、溺水事故の未然防止に向けた教育体制が整備され、将来の子供たちの命を守る基盤が築かれることを期待する。

23日・セッション1

発表時間 13:15~13:30

Oa01. 大学生における海辺をフィールドとする野外教育実習前後の海洋リテラシーの変化

植田晃輔(東海大学大学院), 松本秀夫・川邊保孝・小林俊・松下宗洋(東海大学)

キーワード: オーシャンスポーツ, 海洋教育

【目的】

大学生における海辺での野外教育の前後の海洋リテラシーの変化を観察することである。

【方法】

解析対象者は、2024年度に東海大学における体育学部もしくはスポーツプロモーションセンター開講科目のうち、セッション期間にオーシャンスポーツ実習を行った授業の履修者のうち、調査に同意し、計3回の調査に回答をした学生119名とした。

各授業においてセッション中に行われたオーシャンスポーツのプログラムは、サーフィン、カヌー、スクーバダイビング、もしくは複合プログラム(アウトリガーカヌー、カヤック、サーフィン、スタンドアップパドルボードの複合)であった。

調査はGoogleフォームで行い、実習前(ガイダンス期)、実習直前、実習直後の計3回調査を行った。主な調査項目は、基本属性(性、学年、オーシャンスポーツ経験など)、短縮版海洋リテラシー尺度であった。実習前、実習直前、実習直後における海洋リテラシーの下位尺度(海での活動能力、海についての認識、海での活動経験)得点を二要因分散分析で比較を実施後、Bonferroni法による多重比較を行った。統計処理においては、統計処理ソフトJASPを用いて行った。

【結果】

二要因分散分析の結果、全ての海洋リテラシーの解尺度得点について調査時期と受講科目(種目)の有意な交互作用はなく、調査時期に有意な主効果が認められた。多重比較の結果、「海での活動能力」では、複合プログラム、サーフィンにおいて実習前および実習直前から実習直後にかけて有意に向上した。「海についての認識」では、複合プログラムで実習前および実習直前から実習直後にかけて有意に向上した。「海での活動経験」では、複合プログラム、サーフィンおよびスクーバダイビングで実習前および実習直前から実習直後にかけて有意に向上した。

23日・セッション1

発表時間 13:30~13:45

Oa02. 青少年を対象とした海洋スポーツ活動プログラムの教育的意義とその効果 - 江ノ島における活動を事例に -

小林俊(一般社団法人江の島海洋教育センター), 植田央(帝京平成大学, 一般社団法人江の島海洋教育センター), 松本秀夫(東海大学)

キーワード: 海洋スポーツ, 海洋教育, 指導者養成

【目的】湘南アウトリガーカヌークラブ(以下SOCC)は、2005年、海洋スポーツを通して「自然」を生活に取り入れていく大切さを伝えていくことを目的に江ノ島に設立されている。2007年には青少年を対象とし江ノ島オーシャンキッズを設立、海での活動を通し「元気な心と身体の基盤を作る」「海や自然の中で活動することで、感性豊かに育って欲しい」を目指し300名以上が参加している。2024年3月に一般社団法人江ノ島海洋教育センターを設立した。本研究は、青少年を対象とした海洋教育プログラムの教育的意義、問題点を検討し、その効果を高める方策について考察することを目的とする。

【方法】2007年からのオーシャンキッズ・オーシャンパドラー活動展開、指導者、行事、資金等の問題や改善などの事例と他の海洋スポーツとの比較から特徴と問題点を明らかにし、教育的意義・効果の分析考察を行う。

【結果と考察】2007年に開始した「江の島オーシャンキッズ」は当初、少人数にてSOCCの指導者・会員によって週末に展開され、夏、冬の学校の長期休暇にはキャンプ、スキーなどの行事も行われ年々行事が多くなった。自然の中での海洋教育プログラムの効果は、子どもたち、保護者からの声や継続者にとまなう「オーシャンパドラー」の足元からも顕著なものであった。しかし、活動の展開にとまなう問題となったのが運営上の位置づけであり、収支、指導者や公的支援事業等の応募など、SOCCの下部組織でなく、組織を独立させる必要があった。江ノ島周辺海域での海洋教育プログラムには、セーリング、サーフィン、ライフセービングなど多数存在している。その運営形態は、法人化や民間運営などあり、コンセプト・指導形態・組織も様々であった。

【結論】海においては、確かな組織・指導者による安全な運営が求められる。組織づくり、プログラムの内容は重要あり、それ次第で教育効果も異なる。今後は、海洋教育における指導法、運営など様々な問題について種目を超えた議論をする必要があると考えられる。

23日・セッション1

発表時間 13:45~14:00

Oa03. 大学カリキュラムにおける海洋スポーツプログラムの位置づけと運用課題

川邊保孝・松本秀夫・小林俊(東海大学)

キーワード: 大学カリキュラム, 海洋スポーツ, 一般体育

【目的】1991年の大学設置基準の大綱化により大学において保健体育科目の設置義務がなくなり、多くの大学において体育科目が必修から外れることとなった。一方で、1998年の大学審議会では、体育・スポーツを「社会生活を送る上での教養である」としており、大学カリキュラムにおいて、スポーツ関連の多様な科目が立ち上げられることとなる。その中には海洋スポーツプログラムを教養教育のカリキュラムに位置づける動きや、海洋スポーツプログラム自体を学問領域の一部として専門教育に位置づけている大学も存在する。本研究は、海洋学部や体育学部等を備えた総合大学である東海大学を事例として、大学カリキュラムにおける海洋スポーツの位置づけを整理するとともに、その変遷から、大学カリキュラム内で海洋スポーツプログラムを運用していくうえでの課題を明らかにすることを目的とする。

【方法】東海大学における海洋スポーツ関連の科目に関するカリキュラムやシラバス等の資料を収集し、その内容を整理・分析する。また、カリキュラム策定や授業に関わる教員に対するインタビュー調査から科目運営やカリキュラムに位置づけるうえでの課題を考察する。

【結果と考察】東海大学では、海洋スポーツプログラムが大きく分けて3つのカリキュラムにおいて活用されていた。1つは教養教育として全学の学生を対象とする一般体育としての位置づけである。2つ目は、学部教育における専門科目としての位置づけである。3つ目は、学部等の専門教育から一定の独自性を持って展開された特定プログラムならびに副専攻という位置づけである。

【結論】いずれの海洋スポーツ関連の科目においても大学ならびに学部・学科の各種方針(DPやCP)との関係性を明確にすることが求められており、教育成果の把握に向けた指標開発と同時に各種教育効果を最大化するためのプログラム内容の検討も必要であると考えられる。また、専門性を備えた教員・指導者の確保や安全性の観点からも履修人数が限定的になることなどの授業運営上の特性がカリキュラムの継続に影響していた。

24日・セッション2

発表時間 9:15~9:30

Ob02. 伝統文化帆掛サバニを活用した大学実技授業の実践報告

遠矢英憲・石橋千征（名桜大学）

キーワード：伝統文化、帆掛サバニ、教材開発、大学実技授業、実践報告

【目的】

近年、野外教育の本質に関する原理的議論が活発化している。土方ら（2024）は、「欧米由来とされる野外教育に、日本という場所で育まれた身体的感性が違和を感じるものがなかっただろうか」と問題提起し、「国際的にも先住民の叡智としての自然とのかかわり方に注目が集まっている」と指摘している。これは、地域の自然と人間の適切な関係性について長年にわたり構築・継承されてきた伝統文化を教材化することが、野外教育プログラムの開発において重要であることを示唆している。

この観点から、沖縄県に位置する名桜大学において、沖縄の伝統文化である帆掛サバニを教材化した大学実技授業について、実践報告を行う。

【授業概要】

名桜大学人間健康学部スポーツ健康学科の専門教育科目として、「スポーツ健康学特別実技Ⅱ（パドルスポーツ）」を新設し開講した。この授業では、帆掛サバニとSUP（スタンドアップパドルボード）の2種目を取り扱い、各1コマのオリエンテーションを行った後に帆掛サバニ実習を2日間（2024年8月22日、23日）、SUP実習を3日間（後学期授業期間の各2コマ）実施する構成とした。受講者は8名で、指導は専任教員2名と外部サバニ指導者1名、外部SUP指導者2名が担当した。実習は沖縄県糸満市および本部町で行われ、事前にはNotionを利用したWebページにて動画やアニメーション、テキストを用いた事前学習教材を提供し、反転授業形式で学生の理解を深め、安全性を向上させる工夫を行った。

【帆掛サバニ実技のプログラム詳細】

帆掛けサバニ実技は、事前学習、実習初日、実習2日目の構成で実施した。事前学習では帆掛サバニや海洋知識の教材を課し、実習初日には陸上で装備説明と準備を行った後、海上でパドルリングとセーリングの練習を実施した。2日目には、サバニ浜から岡波島までの往復6.2kmのツーリングを行い、習得した技能を実践的に応用する機会を設けた。この段階的な学習により、学生は理論から実践まで総合的に帆掛サバニの操船技術を学んだ。

24日・セッション2

発表時間 9:30~9:45

Oa04. 南伊豆沖に沈んだニール号研究調査

鉄 多加志・木村 淳（東海大学）

キーワード：海事考古学、沈没船、包蔵地、調査

【はじめに】

フランスの蒸気郵船であるニール号は1874年3月20日にウイーン万博に出展した美術・工芸品を積載したまま沈没した。

本調査は、2004年から4年間に行なった概要をまとめた研究報告になる。

【目的】

ニール号の沈没地点を文献や計測機を使って特定し、周辺の海中を潜水調査することで、残骸や積載されていた船具、収蔵品の探査・掘削を行いウイーン万博研究の一助としたい。

【方法】

潜水調査の範囲を極力狭められるように、船上からサイドスキャンソナー、マルチファンビームを使って沈没地点の絞り込みを行った。強い反応の見られた水深は37mあるため、調査ダイバーの潜水時間が1回あたり10分程度しか取れないため海底地形の把握や範囲の限定は重要な課題であった。

【結果】

左舷後方甲板の一部と考えられる一対のボラード（約4m×7m）が確認された。ニール号のアンカーと考えられる錨が2つ発見された。甲板の排水溝に使われている材料が「伊豆石」ではないかと推察された。2005年に「(伝)ニール号沈没地点」として正式な海中の包蔵地となり、静岡県に登録された。

【考察】

本研究をベースに2018年から調査を再開して当時行っていなかった調査手法を用いて現在も研究を継続している。また、水中調査と並行して、積載品に関する資料や万博関連の研究者から共有していただく情報によって、ニール号に関する研究は新たなフェーズに向かっている。

24日・セッション2

発表時間 9:45~10:00

Oa05. 大阪商船の広報にみられる「花毛布」について
服部恵理子・小西 宗・澁 真輝 (神戸大学大学院)

キーワード: 花毛布、大阪商船、広報

【はじめに】

「花毛布」とは、ベッド上の毛布を用いて種々の形を作り船室を飾る、船客客室係による船客へのおもてなしである。飾り毛布とも呼ばれている。明治時代に始まったとされており、特に海外への往来が航空機に代わるまでの客船において広く行われていたとされる。その形には、花や山などの自然を表したものや、扇や松竹梅など縁起物などがあり、その作り方は船員の口伝で伝わってきたとされている(上杉, 2008)。約120年以上にわたり続いてきた「花毛布」についての研究は少なく、上杉ら(2012)は花毛布の形状やその作り方等を著している。

当時の「花毛布」については、その当時に発行された航路案内や船社広報誌で見ることができる。このような背景のもと、神戸大学海事博物館ならびに国会図書館の資料から戦前戦後を中心とした当時の大阪商船株式会社(以下、大阪商船)の資料を得た。本研究では、大阪商船の広報にみられる「花毛布」について、形状、時代、航路等の情報から考察することを目的とする。

【方法】

神戸大学海事博物館には、仲島忠次郎コレクション、山田早苗コレクションと呼ばれる資料がある。これらは戦前戦後の客船を主とした資料であるが、その中には航路案内や船内案内、竣工記念葉書などの広報資料がある。これらの中から大阪商船の花毛布が掲載されている資料を抽出した。また、国会図書館の資料である戦前の大阪商船広報誌『海』の中から、花毛布が掲載されている記事を抽出した。以上得られたデータを、扇型、花型、岩型などの形状等に分類し分析した。

【結果および考察】

63点の「花毛布」が抽出され、ほぼ一等室に飾られていた。形状については9種類に分類され、扇型、花一輪が多かった。資料の偏りはあるものの、戦前の「花毛布」が多かった。航路としては南米航路や台湾航路の資料が得られた。船室の毛布は大阪商船の大きな字がデザインされていたとみられ、「花毛布」作成に当たっては、大きな字をデザインに取り入れる工夫がされており、当時の船客へのおもてなしの心が推察される。

24日・セッション2

発表時間 10:00~10:15

Oa06 年代による断続的な息こらえ潜水の予備心拍数と血中乳酸値の特徴について

永島昇太郎(帝京大学)、千足耕一(東京海洋大学)

キーワード: 予備心拍数、血中乳酸値、年代、息こらえ潜水

【目的】

本研究では30分程度のスキンドайビングを想定した断続的な息こらえ潜水について、予備心拍数と血中乳酸値に着目し、被験者の出力の特徴について検討することを目的とする。

【方法】

水中活動経験がある成人男性22名(38.8±16.1歳)を対象に、約30分程度のスキンドайビング活動を想定した断続的な息こらえ潜水泳(距離:25m、潜水時間:自己感覚30秒)を10回行い、心拍数、血中乳酸値、潜水泳速度を測定し、心拍数からカルーボネン法を用い予備心拍数を算出した。

なお、統計処理はIBM社SPSS Ver.29にて行なった。

【結果と考察】

全体の測定結果は、予備心拍数:29.2±13.6%HRR、血中乳酸値:2.8±1.2mmol/L、潜水泳速度:0.75±0.15m/sとなり、予備心拍数と血中乳酸値の間に5%水準の有意な相関関係(p=.015)がみられた。

次に予備心拍数と血中乳酸値を用いてクラスター分析を行ったところ、7名(22.0±3.0歳、以下「L群」)、12名(46.9±12.9歳、以下「M群」)、3名(45.3±15.6歳、以下「H群」と、年代での特徴がみられる3つの群に分類することができた。

【結論】

各群の平均値は、L群(予備心拍数:18.5±7.0%HRR、血中乳酸値:1.7±0.3mmol/L、潜水泳速度:0.7±0.1m/s)、M群(予備心拍数:32.8±13.4%HRR、血中乳酸値:2.9±0.2mmol/L、潜水泳速度:0.8±0.1m/s)、H群(予備心拍数:39.4±10.3%HRR、血中乳酸値:5.3±0.6mmol/L、潜水泳速度:0.9±0.1)となり、年代が上がることにより、いずれの値も高くなることが示された。

また、L群では血中乳酸値と潜水泳速度、M群では予備心拍数と潜水泳速度のそれぞれに5%水準の有意な相関関係が示され、潜水泳速度がL群では血中乳酸値に、M群では予備心拍数にそれぞれ影響があることが示された。

24日・セッション3

発表時間 10:20~10:35

Ob03 沿岸海域におけるレスキューブイを活用した行方不明者捜索の効率化について

伊藤裕樹(海上保安庁第三管区海上保安本部警備救難部救難課/東京海洋大学大学院)、千足耕一(東京海洋大学)
キーワード: レスキューブイ、捜索、海上保安庁

【目的】海上における行方不明者の捜索では、IMO(国際海事機関)と国際民間航空機関(ICAO)が共同開発したIAMSAR マニュアルに基づいた漂流予測プログラムを用いて漂流予測を実施しているところであるが、海浜、磯場などの沿岸海域においては、地形等の影響で局所的に風や海潮流が変化し行方不明者の正確な漂流予測が出来ていないことが想定される。これを補完する目的として、事故発生後、現場海域に航空機からレスキューブイ(以下、RB)を投入しリアルタイムの位置情報を基に捜索範囲を設定する方法を試みた。その結果、捜索範囲を絞り込むことができ、行方不明者を早期に発見できた。今後、この効率的な捜索手法の確立を目指すことを目的として、その有効性を検証することとした。

【方法】事案の概要を把握するとともにRBの位置情報等(事故発生からの投入までの時間及び投入地点、発見又は漂着地点)を把握する。次にRBの各地点を起点として、事故発生地点又は行方不明者最終目撃地点、行方不明者発見地点又は漂着地点、漂流予測プログラムの漂着地点等との距離により評価を行なう。

【結果と考察】検証を実施した2事例について、どちらも行方不明者は漂着又は波打際で発見されている。1つの事例はRBから114.5mの地点である事故発生地点と同じ防波堤テトラポッドで発見されたが、発見までに8日を要した。また、調査の結果、最終目撃地点と初期情報を基にしたRB投入地点との距離が500mあった。別の事例ではRBの動き及び漂流予測プログラムの結果から捜索範囲を絞り込むことができ、早期発見に繋がったが、通報時の初期情報と最終目撃地点との距離が297.3m、RB漂着地点との距離が428.1mであった。現在のところ事例が少ないが、事故発生からブイ投入までのレスポンスタイム及び事故発生地点とRB投入地点までの距離が結果に影響をするものと考えられる。

【結論】引き続き検証を行なうとともにRB投入までのレスポンスタイムの向上及び投入方法に関する方策を検討していく必要がある。

24日・セッション3

発表時間 10:35~10:50

Oa07 海上保安庁の事故データに基づくカヌー及びスタンドアップパドルボード(SUP)による釣りの事故防止対策に関する研究

伊藤裕樹(海上保安庁第三管区海上保安本部警備救難部救難課/東京海洋大学大学院)、千足耕一(東京海洋大学)
キーワード: カヌー、SUP、海上保安庁

【目的】近年、カヌー及びスタンドアップパドルボード(SUP)の事故は増加しており、特に釣りをしている際に出艇場所に戻れなくなり緊急通報が必要となるケースが増えている。しかし、この分野での研究はほとんど行われていない。本研究は、海上保安庁の提供する事故データを二次利用し、カヌー及びSUPを用いた釣りに関連する事故の事故防止対策に関する基礎資料を作成することを目的とする。

【方法】海上保安庁の協力を得て、2005年から2023年の間に発生したカヌー(576隻)及びSUP(385人)の事故データ(事故の発生時期、発生場所、事故者の経験年数、事故内容、事故発生時の海象、釣りに起因した事故か否か等)について単純集計し、釣りに起因した事故の特徴を把握した。また、その過程で得られた事故者の経験年数や事故時の海象条件に着目し、釣りに起因した事故者とそうではない事故者との経験年数や事故時の風速の違いを分析した。また、特に風の影響が考えられるカヌーの運航不能及びSUPの帰還不能時の風速についても分析を行った。

【結果と考察】主な分析結果は次のとおりである。

1.釣りに起因した事故の事故者の経験年数について、カイ二乗検定及び残差分析を行った結果、カヌーは1年~3年未満、SUPは1年未満及び1年から3年未満のグループで有意な差が認められた($p<.001$)。

2.風速の影響について、釣りに起因する事故は、釣りに起因しない事故よりも低い風速域で発生しており、クーラーボックスなどの釣り具を積むことによる風圧面積の増加や操作性の低下が影響しているものと考えられる。経験が浅い者は特に風の影響を受けやすく、事故を起こしやすいことが考えられる。

【結論】カヌー及びSUPで釣りをする際には、釣り具の積載による操作性の低下や風の影響を考慮し、通常のツーリング以上に風の影響を受けやすいことを認識させる啓発活動が必要である。

24日・セッション3

発表時間 10:50~11:05

Oa08 ネイチャーガイドを対象としたセーフティマネジメントに関する聞き取り調査

千足耕一（東京海洋大学）・蓬郷尚代（中央大学）

キーワード：ガイド、セーフティマネジメント

【目的】自然の中での活動におけるリスクマネジメントに関する研究をレビューした村越は、一般的に述べられているリスクアセスメントについて批判的に検討したうえで、熟達した人や経験豊かな人々のリスクマネジメントを検討すること、安全工学上の概念であるレジリエンスエンジニアリングの発想を生かすこと、状況認識に関する枠組みを指針とすることなどを提案し、現場での経験から実践知を抽出し活用することの重要性に言及している。本研究では、対応する能力、監視する能力、予見する能力、学習する能力および補完的要件として、リソース配備の適切さ、変化への気づき、成功事例への着目などのレジリエンスエンジニアリングの視点を含んだ聞き取り調査結果から、経験豊かなネイチャーガイドの実践知に関する資料を作成することを目的とする。

【方法】本研究では、エリック・ホルナゲルが提唱したセーフティマネジメントの枠組みとして、ヒューマンエラーの防止およびヒューマンファクター（人的要素）に着目した Safety-I（うまくいかないことを最小化する）と、状況が変化する中で人が行動するときの安全概念であり、人間の臨機応変な対応を含む Safety-II（うまくいくことを最大化する）といった安全観を示したインタビューガイドに沿って、経験豊かなネイチャーガイドを対象に聞き取り調査を実施した。

【結果と考察】作業条件の良好化という点では、ゲストを選び、よく理解する点で共通していた。マニュアル作りと教育訓練では、マニュアルは最小限であり、現場で実行できるように練度を高めておくといった発言が認められた。エラーに対する防御機能という点では、常に選択肢を持ち、計画変更も視野に入れて柔軟に対応するという回答があった。レジリエンスの要素では、状況に応じた対応が可能のように、引き出しを多く備えるためにも経験値を向上させており、状況変化を想像して適切な準備を行っていることが把握できた。

謝辞 本発表はJSPS 科研費（課題番号22K12586）の助成を受けたものです。

24日・セッション4

発表時間 11:10~11:25

Oa09 ダイビング経験と食行動の関係ーダイビング業と漁業の共存を目指して

三宅龍太（東京海洋大学大学院）、若松美保子・松井隆宏（東京海洋大学）

キーワード：ダイビング、食行動、Cカード、水産物

【目的】

これまでの著者の研究では、ダイビングを主目的とする観光客は、現地での食にかかる支出が著しく低いことが示されている。一方で、ヒアリング調査から、ダイビング観光客の経験本数によって観光地での食行動が変化する可能性が示唆された。そこで本研究では、観光客のダイビング経験によって、地域の水産物に対する消費意欲が異なるのかを明らかにし、ダイビング業と漁業の共存を図るための考察を行うことを目的とした。

【方法】

本研究では、ネットアンケートを使用し、沖縄県を訪れた観光客を対象に、ダイビング経験（Cカードのランクを含む）と、地域の水産物を用いた料理に対する支払意思額を調査した。その後、ダイビング経験がどのように関係するかを分析した。

【結果と考察】

Cカード保有者は、Cカードを持たない人と比べ、地域の水産物に対する支払意思額が高くなることが確認された。さらに、オープンウォーターよりも上位ランクの保有者では、この傾向が一層強くなることが明らかとなった。

これらの結果およびこれまでの著者の研究に基づき、ダイビング観光客には2つのパターンがあると考えられる。すなわち、ダイビング活動に集中し、地域の水産物に関心を持たないグループと、ダイビングを楽しみつつ地域の水産物も楽しむグループである。

【結論】

ダイビング業と水産業は、水産物を通じて共存することが可能であり、より良い海の利用につながることも期待できる。しかし、ダイビング観光客を一括りにして考察することはできず、ダイビングに熱中している人については、地元の水産物への興味を持ってもらうためにも、ダイビングショップ全体でのイベント開催などの施策が必要である。

24日・セッション4

発表時間 11:25~11:40

Oa10 ウインドサーフィン・ワールドカップ観戦者における観戦評価と行動意図の関係性：居住地、種目経験、観戦経験の違いに着目して

平野貴也（(一社) レジャースポーツ研究所）、岡安功（広島経済大学）、江崎健司・後藤充裕・瀬下仁志（NTT人間情報研究所）

キーワード：スポーツイベント、サービスクオリティ、観戦行動意図、ウインドサーフィン

【目的】

本研究の目的は、神奈川県で開催されたウインドサーフィン・ワールドカップ2023において観戦者が知覚したイベント評価と行動意図の関係について明らかにする。

【方法】

2023年11月に「Fly! ANA ウインドサーフィン・ワールドカップ横須賀・三浦大会」の観戦者に対し、580部の調査用紙を配布した。回収数541、有効回答数は481部（88.9%）であった。調査内容は属性、観戦行動、サービスクオリティおよび観戦の行動意図であった。イベント評価には平野ら（2017）が作成したサービスクオリティ評価尺度4因子12項目、行動意図にはKoo et al.(2014)の2項目を用い、6段階リッカート尺度を設定した。SPSS29.0及びAMOS29.0によって分析を行った。

【結果と考察】

回答者は男性が56.1%、女性が43.9%であり、年齢は16歳から79歳に分布しており、平均51.18±14歳であった。居住地は、38.9%が開催地内である横須賀市・三浦市在住であった。52.6%にウインドサーフィン(WS)の継続的な実施経験があり、65.5%は観戦のリピーターであった。サービスクオリティ評価因子を独立変数とし、行動意図を従属変数としてステップワイズ法を用いて重回帰分析を行った。その結果、「運営サービス」「会場サービス」「観戦サービス」が行動意図に有意に関係が認められた。一方、「周辺サービス」には有意な関係が認められず、競技や選手の技能を見るというコアプロダクトが観戦者の行動意図に影響を与えているものと思われる。

居住地、WS経験、観戦経験と行動意図との関連については、すべての群において「観戦サービス」と行動意図の間に有意な正の関係性が認められた。関連性の強さでは開催地外居住者とWS経験者の「運営サービス」、開催地内居住者とWS経験のない者は「会場サービス」が行動意図に強く関係していることがわかった。

24日・セッション4

発表時間 11:40~11:55

Oa11 遊漁船利用を伴う釣り愛好者の環境配慮行動に関する調査研究

荒井良乃介・千足耕一（東京海洋大学）

キーワード：遊漁船、釣り、環境配慮

【目的】

釣りは自然環境に密接に関連し、特に海洋資源の保全やゴミ問題への意識が重要視されている。しかし、釣り愛好者がどのような環境保護行動を取っているのか、またその行動に対する意識や動機については、十分な調査が行われていない。そこで本研究では、遊漁船を利用する船釣り愛好者の環境配慮行動及び意識について調査し、持続可能な釣り文化の存立に資するための基礎的な資料を作成することを目的とする。

【方法】

本研究では、遊漁船を利用する船釣り愛好者を対象にアンケート調査を実施した。Google フォームを用いてデータを収集し、回答者の年代、性別、釣り頻度、釣り具や船代への支出、ゴミへの配慮、景観への関心、水産資源保護意識、根がかり懸念についての情報を得た。収集したデータに対して相関分析を実施し、各変数間の関係を調べるため、統計処理ソフト JASP を用いて解析した。

【結果と考察】

620通を回収し、分析対象とした。対象者の男女比率は男性89.4%、女性10.0%、未回答0.6%であった。年代は50代（41.5%）が最も多く、釣り歴は10年以上（56.5%）、遊漁船への支出（船代）は1万円以上3万円未満（48.2%）の回答が最も多かった。

相関分析の結果、ゴミ配慮と水産資源保護意識には有意な正の相関が認められた（ $r=0.26, p<.001$ ）。水産資源保護に強い意識を持つ者は、ゴミや釣り具の扱いに配慮した釣りをすることを重要だと感じる傾向にあり、環境保全に関する意識が高いことが考えられた。

また、根がかりなどにより仕掛けが海中に残存する懸念と水産資源保護意識の間にも有意な正の相関が認められ（ $r=0.39, p<.001$ ）、水産資源保護を重視する者は、釣りによる海底環境へのダメージを懸念していることが示された。更に、釣りをする時の景観への関心とゴミ配慮（ $r=0.25, p<.001$ ）・産資源保護の意識（ $r=0.18, p<.001$ ）の間にも有意な正の相関が確認された。

24日・セッション4

発表時間 11:55~12:10

Oa12 海洋ごみの年間漂着量の実態調査：鹿屋体育大学海洋スポーツセンター前の海岸を対象とした事例研究

笹子悠歩（鹿屋体育大学）、寺尾碧（株）東予交通）、榮樂洋光（鹿屋体育大学）

キーワード：漂着ごみ、季節変動、SDGs

【目的】

近年、海洋ごみが世界的に大きな問題となっている。我が国においても、各自治体や民間団体等がビーチクリーン活動を実施し、漂着ごみの回収・削減に取り組んでいる。しかし、これらの団体が限られた予算の中で、ビーチクリーン活動を頻繁に実施することは困難であり、一般的には年に数回程度である。海洋ごみの漂着量は、季節や日々の天候によって変化すると考えられる。そのため、どの季節に漂着量が多いのかや、漂着量と天候との関係を明らかにすることができれば、ビーチクリーン活動の効率を高める上で、有益な知見になると考えられる。しかし、この点について、年間を通して検討した研究は見当たらない。そこで本研究では、一つの海岸を対象に漂着ごみの量を週に1回測定し、海洋ごみの年間漂着量、およびその季節変動や天候との関係を、事例的に明らかにすることを目的とした。

【方法】

調査対象は、鹿児島県の錦江湾沿岸にある、鹿屋体育大学海洋スポーツセンター前の海岸（全長約180m）とした。測定期間は、2022年9月から2023年8月までの1年間とし、週に1回（計52回）、漂着したごみを全て手作業で回収した。なお、回収したごみは、可燃ごみ、不燃ごみ、産業廃棄物の3つに分け、可燃ごみと不燃ごみに関しては重量と体積を、産業廃棄物については、個数を記録した。

【結果と考察】

可燃ごみは年間で177.6kg、不燃ごみは27.8kg、産業廃棄物は27個であった。月単位で見ると、可燃ごみは9月（44.6kg）と7月（63.6kg）が最も多く、南西の風が吹く、夏から秋にかけて漂着量が多くなっていた。

【結論】

鹿屋体育大学海洋スポーツセンター前の海岸には、1年間に約200kgの海洋ごみが漂着しており、これらのごみは、南西の風が吹く、夏から秋にかけて、特に多く漂着していることが明らかとなった。

24日・ポスターセッション

発表時間 12:15~12:45

Pb01 海中から回収したゴミの利用方法について

鈴木風・満田かなん（東海大学海洋学部）

キーワード：海中清掃、海中ゴミ、三保、再利用

【はじめに】

海中美化プロジェクトとは、東海大学チャレンジプロジェクトの一環として2019年より活動している団体である。静岡キャンパスのある三保真崎は様々なマリレジャーの利用場所であり、近年釣りによって発生するゴミにより海中の美観が乱されている。釣りゴミの増加は水中生物の生息環境の悪化やダイバーの水中拘束のリスクなど、諸問題の根源となるため、本プロジェクトでは海中景観改善および海中作業の安全管理をスローガンに海中及び海岸の清掃を開始した。また、今年度より回収した海中ゴミの再利用の方法を模索し、ゴミを回収する活動だけにとどまらず海洋環境の未来を模索する事を新たな目標とした。

【活動内容】

海中ゴミの回収はスクーバダイビングを用いて行っている。海岸ゴミに対しても海中清掃と並列して1時間ほど回収を行っている。回収終了後場所ごとに分別して各種ゴミの個数や重量を記録している。さらに、海中ゴミに関しては再利用を検討するために、釣具の材質ごとに分別を行っている。今回は最も多く見られた鉛に注目し、スクーバダイビングで用いるウエイトの作成を試みた。また、多くの人に海中で起きている現状を知ってもらうため、セミナーやSNS等で発信し活動に対する理解を求めている。

【今後の展望】

今年度は昨年に比べプロジェクトメンバーが41人から60人へ増え、活動の新規開拓や規模の拡大をすることができた。ゴミの再利用については、より身近で誰でも取り組めるものを模索し、社会に発信していきたい。一方で三保真崎における詳細なゴミの推移や分布を探るまでには至っていないため、今後はデータを収集することで、ゴミ種類や発生源、数量を明確にし、それをもとに海中及び海岸のゴミについて地域と連携して対策を考えてゆきたい。

24日・ポスターセッション

発表時間 12:15~12:45

Pa01 移住したアウトドアスポーツ実践者のワークライフ・インテグレーションと Well-being テキストマイニングからの分析

松本秀夫・鉄多加志（東海大学）

キーワード：アウトドアスポーツ、Well-being

【目的】我々はこれまでの研究で、海洋スポーツ愛好者が関与の高まりから「仕事や居住地を変える」「コミュニティへの帰属を高める」などライフスタイル変容を行いウェルビーイングが高いことを明らかにした。また、質的分析から海洋スポーツに関係した移住者の特徴を時系列に分析し、仕事、趣味、家庭などの状況によって特徴が異なることを示し仕事と生活の統合としてワークライフインテグレーション（以下 WLI）は浸透しているように考えられる。これらはインタビューテキストの質的な分析から特徴や分類を試みているが、テキストデータの量的な分析は行っていない。本研究はインタビューデータをテキストマイニングによる量的な分析から行含めた行うことを目的とした。

【方法】インタビュー調査は2023年3月~2024年3月に実施した。研究協力者は、機縁法により募り移住経験を持つ人18名（スキー移住者3名を含む仕事としている人8名、愛好者10名）。30分~40分の半構造化インタビューを実施した。質問内容は、種目の経験、移住時期・目的、レジャー関与、Well-being の変化、WLI とした。面接は説明後、同意を求め、本人了承を得て IC レコーダーに録音した。文字起ししたインタビューテキストをテキストマイニング分析し、頻出語、共起ネットワーク、階層クラスタリング等の分析を実施した。

【結果と考察】テキストマイニングによる分析の結果、仕事にした人と愛好者、移住場所（O 県、K 県、N 県）、などの共起ネットワークに特徴がみられた。仕事にした人と愛好者では移住に関する単語とのつながりが異なり、特に仕事にした人は、その経緯などの語句が繋がりを持って現れた。詳細な分析結果は当日報告する。

【結論】テキストマイニングの分析結果から、移住、WLI、Well-being について、文脈等を含めた質的分析では見えなかった単語どうしのつながりを可視化でき、その関係の裏付けや新たな視点が明らかにされた。

【謝辞】本研究は科学研究費補助金（基盤研究 C、松本秀夫課題番号 21K11560）の助成を受けて実施された。

編集後記

第13回学会大会は学会設立以来、初めて開催会場が東京海洋大学品川キャンパスから離れ、東海大学静岡キャンパスにて開催する運びとなりました。加えまして、開催期日も例年の9月から11月に変更しましたことから、これまでの学会大会とは異なる趣向を感じて頂けるものと思っております。

基調講演は、講師として株式会社 gosea's 代表取締役・東海大学海洋学部客員准教授でいらっしゃる合志明倫先生にご登壇頂き、東海大学静岡キャンパスのお膝元である清水港周辺の海洋スポーツによる振興についてお話を頂けることとなりました。また、今年の学会のポスター発表では、北海道小樽水産高等学校の皆さまに特別参加して頂きましたが、今年はアカデミックコンテスと題し、北海道小樽水産高等学校のほか、地元静岡の5つ高校のご参加を得まして、各校における海洋に関連するさまざまな活動や取り組みについてご発表頂きます。

一般発表につきましても、会場や期日の変更が演題申し込み数にどのような影響を及ぼすのか、“蓋を開けてみないと”という面もありましたが、前回大会とほぼ同数の口頭発表15題、ポスター発表2題となりました。この場をお借りしまして、ご発表頂ける皆さまに厚く御礼申し上げます。

(藤本浩一・第13回学会大会実行委員兼任)

日本海洋人間学会編集委員会

委員長／松本秀夫

副委員長／小泉和史、藤本浩一

委員／遠矢英憲、中塚健太郎、梶 真輝

海洋人間学雑誌 第13巻第2号

2024年11月 発行

発行者 久門明人

発行所 日本海洋人間学会

〒108-8477 東京都港区港南 4-5-7 東京海洋大学内

郵便振替 加入者名 日本海洋人間学会

口座番号 00150-6-429943

TEL/FAX : 03-5463-0638 (藤本研)

URL : <https://www.jsmta.jp/>

E-mail : jsmta@jsmta.jp

海洋人間学雑誌 投稿規定

“海洋人間学雑誌”は日本海洋人間学会の機関誌であり、海洋における人間の健康と安全ならびに海洋スポーツ競技と海洋教育の進歩と発展に寄与することを目的とするものである。

本誌の英文名は“Japanese Journal of Maritime Activity”とし、略称は“Jpn J Marit Activity”とする。

I. 原稿の種類

1. 投稿原稿

投稿論文には以下の種類を設ける。1-①総説、1-②原著、1-③短報、1-④研究資料、1-⑤実践研究、1-⑥報告（事例、調査、視察、事業・活動等）、1-⑦その他（Letter to the Editor、学会大会抄録など）。

1-①総説：特定の研究領域に関する主要な文献内容の総覧として、その内容は、単なる羅列ではなく、特定の視点に基づく体系的なまとまりを持つことが必要となる。

1-②原著：科学論文としての内容と体裁を整えているもので、新たな科学的な知見をもたらすものである。

1-③短報：科学論文として単体で完結しており、学術的重要性が高く即時的に公表すべき最新の知見を提供しうるものである。

1-④研究資料：調査や実験の結果を主体にした研究資料であり、客観的な資料として価値が認められるものとする。

1-⑤実践研究：現場からの貴重な情報を基にした研究で、指導法に関する実用的研究や、総合的に分析した研究などが含まれる。

1-⑥事例報告：事例として、調査、視察、事業などを詳細に調査・研究し、その結果を報告する。

1-⑦その他：Letter to the Editorは本誌掲載の論文に関する質疑やコメントなどを編集委員会に寄せ、編集委員会が論文執筆者に回答を求めるものである。質疑やコメントと回答は合わせて同じ号に掲載する。質問者も回答者もすべて実名とし、また両者は相反する利益、業務に支障をきたすような利害関係がない事を条件とする。

2. 依頼原稿

学会の趣旨に関連した貴重性や有用性が高いと認められるテーマ、あるいは会員相互の連携や学会の発展に資するテーマについては編集委員会が論文執筆を依頼するものとし、以下の種類を設ける。2-①依頼総説、2-②依頼報告（事例、調査、視察、事業・活動等）、2-③教育講座、2-④その他（議事録、学会記、研究紹介、会報など）。

II. 投稿原稿および依頼原稿に関する一般規定

1. 投稿原稿と依頼原稿の共通項目

A. 原稿作成には和文（日本語）を用いることとする。他の言語を用いる場合は英語のみ可とする。

B. ヒトや実験動物を対象とした生理学的、心理学的研究など、または報告などにおいても、倫理上または個人情報上の特別な配慮が必要となる場合は、関係法令の遵守と文部科学省ならびに厚生労働省のガイドライン等をよく参照した実験遂行・原稿作成に十分留意し、大学、研究機関等における倫理審査において許可されていることが望ましく、承認の有無を本文に記述すること。また、利益相反については、適切な開示に努め記述すること。

D. 本学会誌はオンラインジャーナルであるため論文別刷りの作成は行わない。別刷り相当物が必要な場合は本学会ホームページなどのインターネット媒体より入手して頂きたい。

E. 本誌は、オンラインジャーナルであることから、1-④研究資料、1-⑤実践研究、1-⑥事例報告においては、動画の使用も認める。投稿にあたっては、編集委員会に事前に問い合わせること。

2. 投稿原稿

A. 原稿は、他誌に未掲載かつ完結したもののみを受け付ける。また同時に他誌に投稿することはできない。

B. 筆頭者は本学会の会員に限るが、共著者についてはこの限りではない。入会手続きは学会事務局まで問い合わせること。

C. 原稿には表紙を添付すること。なお表紙には以下の内容を記載すること。原稿の種類：本投稿規定の「I. 原稿の種類」に準拠して表記する、タイトル：和文と英文で表記する。なお本学会ホームページから投稿原稿の見本がダウンロード出来るので参照のこと。

D. 本学会ホームページからダウンロードできる投稿連絡票に所定の事項を記入して原稿と一緒に送付すること。なおファイル名は以下の例を参照のこと。

例、投稿連絡票_海洋太郎

この投稿連絡票について、1-⑥報告、1-⑦その他（Letter to the Editor）のキーワードは不要とする。1-⑦その他（学会大会抄録）のキーワードについては大会案内号などにて別途定める。

E. 抄録は、本文とはページを変えて、和文 300 字以上 400 字以内および英文 200 語以上 300 語以内で各 1 枚ずつ添付すること。また、英文抄録はネイティブチェックを受けることが望ましい。

1-④研究資料、1-⑤実践研究、1-⑥報告、1-⑦その他（Letter to the Editor、学会大会抄録など）は、和文および英文抄録の添付は任意とする。

F. 章立ての構成、見出し等は、研究専門領域に応じて適切なものを使用するが、原則、以下の例に準拠すること

(例:「目的(※もしくは「はじめに」「緒言)」「方法」「結果」「考察」「結論(※もしくは「結語」「まとめ)」「引用文献)」。1-⑦その他(Letter to the Editor)は「編集委員長へ」「引用文献」とすること。ここで挙げた論文種別以外の章立てについては、専門研究領域の1-⑦その他(学会大会抄録など)は別途大会案内号などにて定めるが、原則として著者の意向どおりとする。

G. 原稿の長さは、1-①総説、1-②原著、1-④研究資料、1-⑤実践研究、1-⑥報告は、抄録(①・②のみ)、図表(縦5cm×横7cmに縮小印刷が可能なもの1点を400字相当と換算する)および引用文献などを含めて刷り上がり8ページ(1200字/原稿1ページ×10枚)以内とし、1-③短報と1-⑦その他(Letter to the Editor)については同様に4ページ以内を基本原則とする。しかし、本学会誌はオンラインジャーナルであることから、事前に編集委員長に問い合わせること。また1-⑦その他(学会大会抄録)については大会案内号などにて別途定める。

H. 査読(1-⑥、1-⑦を除く)は、論文および報告の内容および体裁と必要書類の確認等を編集委員会で審査を行い、必要があれば編集委員会より筆頭者に修正を求める。査読者は、編集委員会が原稿の内容により適任者を本学会内外を問わず3名選定し依頼する。審査結果は、A: 受理(変更改訂の必要なし) B: 受理(多少修正の必要あり) C: 再投稿要請(大幅修正の必要あり、再査読) D: 掲載不可として、査読者からの指摘やコメントを、筆頭者に「査読結果通知書」として連絡する。修正要請等がある場合は通知書発信日より2ヶ月以内に修正した論文を提出すること。期限内に提出されなかった論文は不採択とする。査読は3名のうち2名のA判定で掲載可とする。1-⑥報告については原則査読を実施せず、編集委員会内での掲載審議により掲載を決定する。最終的な採否は編集委員会の審査によって決定し、その日をもって受理年月日とする。なお掲載は原則として総説、原著、短報、研究資料、実践研究、報告の順番とし、同種論文間では採択順とする。「掲載不可」の査読結果に異議がある場合、筆頭者はその反論を附して異議申し立てをすることができる。同一投稿に関する異議申し立ては1回とし、その期間は「掲載不可」の通知日より1ヶ月以内とする。異議申し立てがあった場合、編集委員会は合議のもとで、原則1ヶ月以内に異議申し立ての可否を決し筆頭者に通知する。再審査を行う場合の対象原稿は「掲載不可」確定時のものとする。この原稿に修正等を加えた場合は再審査の対象とはならず、再投稿として扱う。再審査は、新規投稿と同様な方法で行う。ただし、この原稿受付日は最初の原稿の原稿受付日とする。また、原則として最初の原稿の担当査読者を除く候補者の中から新たな査読者を選定する。

※ Letter to the Editorと学会大会抄録については、編集委員会において受理を検討し、不採択となる場合もある。

I. 投稿原稿および図表は、それぞれ別のファイルにしてPDF形式のファイルに変換し、これらを電子メールに添付して学会事務局メールアドレスに送信すること。なお、送信メールの「メール件名」および「ファイル名」はI-1で示した論文種別を参照して必ず下記の例のようにすること。

例1、メール件名 「原著投稿_海洋太郎」、「報告投稿_海洋次郎」

例2、ファイル名 「原著投稿本文_海洋太郎」、「原著投稿図表_海洋太郎」

なお、掲載可となった原稿は、著者が学会誌用の定型フォームに割り付けを行い、編集委員会に提出すること。

J. 投稿料は、1-①総説、1-②原著、1-④研究資料、1-⑤実践研究、1-⑥報告(5ページ以上)については1編あたり10,000円とする。1-③短報、1-④研究資料、1-⑤実践研究、1-⑥報告の4ページ以内原稿については1編あたり5,000円とする。1-⑦その他は無料とする。投稿料の支払いについては、学会事務局の郵便振込口座に振り込むこと。なお振込用紙には内訳(例:原著投稿料として)を記入すること。

3. 依頼原稿

- A. 他誌に未掲載の原稿であることを原則とする。
- B. 筆頭者および共著者が、本学会の会員であるか否かは問わない。
- C. 抄録は、2-①依頼総説、2-②依頼報告について和文もしくは英文で作成を依頼する場合もある。
- D. 章立ては、II-2-Fを参考とすること。
- E. 原稿の長さは、基本的にII-2-Gに準じる。
- F. 原稿の郵送方法、著者校正、最終稿の提出等に関しては、依頼者へ個別に連絡する。
- G. 投稿料は発生しない。

III. 原稿作成要項

1. 原稿はワードプロセッサなどによる機械仕上げのものとし、書式は下記の事項に準拠して作成すること。用紙:A4判、文字数/1頁:1200字(40字×30行)、余白:上下端および左右端を広くとること、図表位置の指定:右の余白に挿入位置を赤字で指定すること、行数:左の余白にページ毎に表示させること、ページ数:下端(フッター)中央に、表紙および和文、英文の抄録を除いた本文のみのページ数について記載すること。ランニングタイトル:上端(ヘッダー)右端に20文字以内で記載すること。以上、学会ホームページよりダウンロードできる投稿原稿の見本を参照のこと。
2. 日本語原稿は現代かなづかい、常用漢字とし、外国語、引用文献等の外国固有名詞はその言語を用いること。数字はアラビア数字を用いることを原則とし、単位符号はCGS単位(mm、sec、cm、ml、 μg など)を用いること。数式中の数、数値や量、統計法に用いられる記号、動物・植物の学名などはイタリック体を用い、それ以外、イタリック体は用いないこと。和文の句読点は「、」「。」を用いること。

3. 引用については、本文中で文献の一部を直接引用する場合は、引用した語句または文章を、和文の場合は「」、英文の場合には“ ”でくくること。引用文献は、番号を片括弧にて記載すること（例：単独の場合「篠宮³⁾によると…」、複数の場合「佐野ら¹⁾ Ferrigno ら²⁾」)。複数の文献を同一箇所引用する場合は、連続の場合ハイフン「-」、連続でない場合はカンマ「,」でつなぐこと（例：「…一連の研究がある²⁻⁴⁾」「…などの報告がある^{3,5,9)}」)。

4. 文献表の作成は、原稿の最後には出現順にまとめたリストを掲載すること。なお引用していない文献を記載してはならない。表記は以下の例を参照し、スペースはすべて半角、「,」「.」「:」ともにすべて半角を用い、そのあとには半角スペースをあけること。欧文の雑誌名は、短縮表記とすること。

例1. 雑誌の場合

1) 佐野裕司, 菊地俊紀, 阿保純一: 加速度脈波を用いた簡便な潜水反射試験法の開発. スポーツ整復療法学研究, 8(3):103-110, 2007.

2) Ferrigno M, Ferretti G, Ellis A, Warkander D, Costa M, Cerretelli P, Lundgren CE: Cardiovascular changes during deep breath-hold dives in a pressure chamber. J Appl Physiol, 83(4):1282-1290, 1997.

例2. 書籍およびプロシーディング等の場合

3) 篠宮龍三: ブルーゾーン. 牧野出版, 東京, pp134-137, 2010.

4) Agostoni E: Limitation to depth of diving. In: Rahn H. et al. (Eds.), Physiology of breath-hold diving and the ama of Japan, National Academy of Sciences - National Research Council, 139-145, 1965.

4. 図表の作成は本文とは別のファイルに、1つごとに1ページを用いて鮮明に作成すること。図表内の文字、タイトルおよび説明については、英文アブストラクトの必要な和文原稿の場合、英文を併記することが望ましい。なお刷り上がり時の横寸法の大きさ（片段横寸法7cm、段抜き横寸法16cm）に留意すること。また受理後に寸法および鮮明さに関する問題が生じた場合、著者に再作成を依頼する場合もある。

5. 注記は、本文・図表で説明するのが適切ではなく、補足的な説明が必要不可欠な場合に用いること。注をつける場合は、本文のその箇所に注¹⁾、注²⁾の通し番号をつけ、本文と論文末の引用文献の間に一括して番号順に記載し、注記の見出し語は「注」とすること。

6. 倫理審査、利益相反、謝辞および研究資金については、原稿投稿時は**等で大学名、企業名、氏名をふせること。査読終了後に編集委員会承認の上、正確に記述すること（例：倫理審査「***大学倫理委員会の承認を得て実施された」、利益相反「本研究は****会社より機材の提供を受けた」、謝辞「****氏に助言をいただいたことを感謝します」、研究資金等「本研究（の一部は）、科学研究費補助金（21KXXXX、代表：○○○○）の助成を受けたものである」。

本誌に掲載された著作物の著作権については、著作権規程を参照のこと。

本誌に係る二次出版（Secondary Publication）については、編集委員会に問い合わせること。

2013年3月8日
一部改正 2014年8月28日
一部改正 2021年7月1日
一部改正 2023年3月16日

日本海洋人間学会 著作権規定

第1条 目的

本規定は、日本海洋人間学会（以下、「本学会」と記す）の出版物等に掲載される著作物に関する会員及び依頼原稿執筆者等（以下、あわせて「会員等」と記す）の著作権に関する基本事項を定める。

第2条 定義

本規定において、次の各号に掲げる用語は、当該各号に定めるところによる。

(1) 著作物

著作権法第2条第1項第1号に規定するものであって、本学会の機関誌「海洋人間学雑誌」の投稿規定に掲げられる全ての投稿原稿および依頼原稿、及び本学会が別途指定するもの。

(2) 著作者

会員等であって、著作権法第2条第1項第2号に規定するものをいう。

(3) 著作財産権

著作物の著作財産権をいい、著作権法第21条（複製権）、第22条（上演権及び演奏権）、第22条の2（上映権）、第23条（公衆送信権等）、第24条（口述権）、第25条（展示権）、第26条（頒布権）、第26条の2（譲渡権）、第26条の3（貸与権）、第27条（翻訳権、翻案権等）及び第28条（二次的著作物の利用に関する原作者の権利）に定めるすべての権利を含む。

(4) 著作者人格権

本著作物に関する著作者人格権をいい、著作権法第18条（公表権）、第19条（氏名表示権）及び第20条（同一性保持権）に定めるすべての権利をいう。

(5) 著作権

著作財産権及び著作者人格権をいう。

第3条 著作権の帰属

本学会において、著作物の著作権は、著作者に帰属する。

2. 著作物に関連して、本学会が創作した二次的著作物及び編集著作物の著作権は学会に帰属する。

第4条 著作者の責任

著作者は、本学会に対して、著作物が第三者の著作権、その他第三者の権利を侵害しないことを保証する。

第5条 著作権侵害等の対応

著作物について、第三者の著作権の侵害、著作物による第三者の名誉の毀損を原因として、著作者もしくは本学会に対する訴訟提起、権利の主張、異議、苦情、損害賠償請求等がなされた場合においては、著作者および本学会は協力して、これに対処するものとする。

第6条 著作物のクリエイティブ・コモンズ・ライセンス

本学会は、著作物を Creative Commons (CC) ライセンス BY/Attribution (表示) - SA/Share-alike (継承) 4.0 国際 (CC BY-SA 4.0) を表示して公開する方針とする。

第7条 オンラインによる学会大会等におけるコンテンツガイドライン

本条項については、著作権法上の公衆送信に相当するため、学会大会等毎に別途定める。

第8条 その他

本規程に定めのない著作権等に関係する事項に関しては、本学会および会員等は、別途協議のうえ円満に解決を図るものとする。

附則

1. この規定は、2021年12月6日から施行する。

参考：CC ライセンス BY(表示)-SA(継承) 4.0 国際

<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/legalcode.ja>

海洋人間学雑誌に掲載される著作物のオープンアクセスポリシー

海洋人間学雑誌に掲載される著作物は、オープンアクセスジャーナルとして公表し（ゴールドOA）、エンバーゴ期間は設けない。また、プラットフォームは日本海洋人間学会 HP とする。各大学等における機関リポジトリ等に、著作者自身が著作物を登録することを妨げないが（グリーンOA）、海洋人間学雑誌に掲載されている著作物と同一であることを条件とする。

2021年12月6日施行

Vol.13 No.2

November 2024

Japanese Journal of Maritime Activity



Japan Society for Maritime Activity (JSMTA)